

「変わらないもの」

- 青木宏美 (電話中) ん～～～。だからさあ。……え?! ううん、違うよお。わたしが言いたいのはねえ。…もう、じゃいいよ。あとでまた。うん、うん、分かった。うん。バイバイ。
- (効果音) (受話器を置く音)
- 宏美(モノローグ) あーあ。どうしてなんだろう。みんなも高校入ってから1年たって、こんなにも変わっちゃったのかなあ。わたしはただ昔のように、みんなで集まって、いろんなところ行ったり、遊んだりしただけなのに。孝二に限らず、ほかの人もそうなのかなあ。紀之だけには変わってほしくないよ。あのままの紀之が好きなんだもん。だからほかにカレもつくらず、いつも紀之の写真見て。あー会いたいなあ。
- ナレーション 電話の主は青木宏美。青春高校 1 年生。彼女には、孝二と紀之、妹子^{まいこ}と芳江という中学時代からの友達がいて、芳江とは、同じ高校に通っています。5 人は大の仲良しで、テスト勉強をするのも、遊びに行くのも、いつも一緒に行動していたほどの仲でしたが…。
- ある日のこと――。
- 紀之 宏美、久しぶりじゃん。
- 宏美 え? 紀之! えええ――! 変わっちゃったのねえ。分かんなかった。
- 紀之 ほうか? 変わったか? 今さ、おれ、サーファーやってんだ。冬でもバリバリ波乗りやってよう、湘南とか来いよ。休みの日なんか、ほとんどいるからさ。
- 宏美 独りで… やってんの?
- 紀之 ううん。一応彼女連れてったりしてんだけどさ。あいつには波乗りはさせない。危ねえしよ。あ、宏美も波乗りやらねえ? ボードに乗れるようになるまでなら、教えてやるよ。じゃまたな。急ぐんだ。バイバイ。じゃあー(遠ざかる)
- 宏美 バイバイ! (モノローグ) “彼女”…? 紀之のバカア。何が「あいつには波乗りはさせない」よ! 「危ねえしよ」だってえ?! それじゃ何でわたしには「やらない?」とか言って勧めるのよお。どういうつもりよお。高校が同じだかなんだか知らないけど、彼女だってすぐ別れるわよ! 紀之はわたしのものなんだからね! だけど紀之は… わたしに「好きだ」なんて言ったことないや。その子、「付き合ってくれ」って言われたのかな。どうしてえ? どうしてなのよお。紀之は昔のままだと思ってたのに。紀之…。
- ナレーション もしかしたら、紀之への気持ちは、わたしの片思いかもしれない。ここ数か月、連絡のなかった紀之に、ひそかに抱いていた不安が現実となって、宏美はショックをかみ締めながら、うつろな数日を過ごしました。そしてそんな気持ちを抑

えきれなくなって、芳江の家を訪れたのでした。

宏美 (泣きじゃくる)

滝沢芳江 ねえ宏美、宏美ってばあ。あんた、紀之が彼女をつくったから泣いてるの？ それとも…。

宏美 どっちもよ。だって、孝二に電話した時だって、「おれ、外国ミュージシャンのギグに、妹子と行くんだよね。それに、おれもバンド組んだから、練習もあるし。」って、当分会えそうにないようなこと言ったあとに、「ヒロも何か始めたら？」って言われて、「みんな今の生活のほうが大切なんだなあ」、なんて思ってた。でもわたしは、「自分はこのままでいいんだ。きっと紀之なら、分かってくれるだろうし、紀之自信も昔のままでしょう」と思って、開き直ってた。紀之、紀之まで！ そいで、この 2、3 日、すっかり考え込んでたの、わたし。

芳江 ふーん。どんなこと？

宏美 うん。「わたしが今一番しなきゃいけないことは何かな？」って。孝二の勧めた音楽とか、紀之が夢中になってるサーフィン、恋愛。それからファッションとかも考えたのよ。でも、どれもわたしには外見でしかないのよね。それでも探そうと思ったの。自分のためになるよいこと、昔とは違って、古いものと縁を切れること、変われること…、って。やっぱり、どれもわたしは変わらないのよ。変わろうとして髪も切ったわ。でも、何か足りないの。でも、“変わらなくちゃ取り残される”って焦りが出てきて…。そんな時、「あ、芳江に相談してみよう」と思ったんだ。如何すればいいの？ わたし、分かんない。気持ちばっかり焦っちゃって。

芳江 そうか。そういうわけ…。(モノローグ・祈り) イエス様、助けて。宏美をどうやって慰めればいいんですか？

ナレーション そう、滝沢芳江は、中学 3 年の時に、イエス様を信じてクリスチャンになったのですが、5 人の仲間には、宏美にさえ、そのことを表立って話してはいませんでした。なんとなく、このことで仲間外れになるのがイヤだったのです。でもすっかり意気消沈している宏美を前にして、このチャンスに、少しでも神様の愛を伝えようと思ったのでした。その時――。

(効果音) (電話のベル)

芳江 あ、電話。宏美、ちょっと待って。はい、滝沢です。はい、あ、わたし芳江です。はい。……え？ 妹子が？ ウソ！

宏美 どうしたの？ 芳江。何かあったの？ 妹子が何？

芳江 あ、あのそれで妹子の具合は？ …ああ、そうですか。はい。はい。榊原病院ですね？ 分かりました。はい、今すぐ行きます。それじゃ。

(効果音) (電話を切る音)

宏美 ねえ、だれから？ ねえ、妹子、どう… どうしたの？

芳江 妹子のお母さんから。妹子がケガしたらしいの。でもそんなにひどくないらしい。
妹子ね、孝二君とライブハウス行ったんだって。その時のお客の中のガラの悪いパンクスたちの暴動に巻き込まれて、チェーンとかパイプで腕ケガしたんだけど、意識はしっかりしてて、大したことないって。でも「できたら病院に来てくれ」って妹子が言ってるんだって。行きましょう。

宏美 本当に、妹子、平気なのね？

芳江 うん、平気よ。さ、行こう。

ナレーション 芳江は、今しがた宏美に話そうと思って出した聖書をしっかりと抱えていきました。

(効果音) (病室のドアをノックする音)

妹子 はい。

妹子 来てくれたのね。来ないと思った。学校変わってから、友達とかも変わっちゃうから。

芳江 どうして？ 学校変わったからって、変わるわけじゃないじゃん、わたしたち。宏美と一緒に飛んできたよ。大丈夫？ 傷、平気？

妹子 うん、平気。1 週間もすれば退院できるって。

宏美 よかった。で、孝二君、来てないの？

妹子 あ、今ね、紀之んちへ行ってるよ。あたしのこと知らせに。連れてくるって、ここへ。

宏美 ほんと？ じゃ、またここでみんな会えるんだあ。

(効果音) (ノックする音)

妹子の母 妹子、吉村先生よ。

吉村先生 妹子、どうした？

妹子、宏美、芳江 (口々に)「吉村先生！」「先生！」「先生！」

吉村先生 ああ、宏美に芳江か。早速駆けつけたんだな。お母さんから、「間もなく紀之と孝二が来る」ってお聞きしたから、またお前たち 5 人がそろそろわけだ。妹子、よかったな。

妹子 はい。

ナレーション 吉村先生は、みんなが中 3 の時の担任だったのです。芳江は、クリスチャンの吉村先生の導きで、イエス様を信じたのでした。

芳江 先生、ここへくる前ね、宏美と話してたの。あのね、宏美と紀之、仲良かったでしょ？ でも(宏美に)宏美、言っちゃうよ。いいでしょ？

宏美 ええー！ う、うん。

芳江 紀之ね、高校入ってからなんだか変わっちゃって、自分から遠いところへ行っちゃったんで、宏美、すぐく落ち込んでたの。ね？

宏美 うん。でも紀之のことだけじゃないの。孝二も、妹子も、学校変わっちゃってほ

とんど会えなかったでしょ？ みんなどんどん変わっていく。自分の手の届かないところへ行っちゃう。わたしだけが取り残されていく。そう思うと、寂しくて、むなしくて、頭の中ボロボロにして、一生懸命わたしも「変わろう、変わろう」って頑張ったけど、ダメなの。苦しかったんだ、わたし。みんなは感じない？ 妹子も芳江も平気なの？

妹子 平気なわけじゃないじゃん。あたしさあ、「もう自分は高校生なんだから、昔は昔、今は今、自分には自分の新しい生き方があるんだ」って、ムリに自分を納得させて、今までやってきたの。でも心の中じゃ、時々ふっと、宏美や芳江や先生のこと考えて、なんか無性に懐かしくて、悲しくて、胸がキューンとなっていた。だから、こうやって、みんなが着てくれて、あたし…(涙ぐむ)

母 本当にこの子ったら、「皆に会いたい。お母さん、呼んで」って、そればかり言っていたんですよ。

芳江 あかね、先生もいるから、わたし思い切って言うけど、わたしがイエス様を信じてるのは、知ってるでしょ？ でね、この聖書の中に、わたしの好きな言葉があるの。(開く)「イエス・キリストは、昨日も、今日も、いつまでも変わることがない」って。これ、わたしがバプテスマ、洗礼を受けた時、吉村先生が贈ってくれた言葉なんだけど、わたしがどんなに変わっていても、落ち込んでいってイエス様が見えなくなっても、イエス様の愛は決して変わらない。お前がどこにいても、どんな状態の中からも、帰っていける。イエスさまは心のふるさとなんだって。

吉村先生 うん。芳江、よく覚えてたな。みんなの友情も、そんなであってほしいな。妹子も、宏美も、芳江も、孝も紀之も、確かにもう 1 年前と全く同じじゃない。同じであっちゃいけないんだ。君たちは、それぞれ自分の人生を、前のものを目指して歩いていく。古い自分を脱ぎ捨てて、変わっていかなくちゃいけない。それは見せかけやカッコじゃないぞ。“ものの考え方”だ。より成熟した、責任のある大人としての自分を目指して、だ。だがな、その中で、“変わらないもの”、いや、これだけはどんなことがあっても変えてはいけないものも、あるんじゃないかな？

ナレーション 宏美はその時、妹子や芳江と、お互いに顔を見合わせました。そして無言のうちに、うなずき合ったのでした――。

<完>